

全商簿記実務検定 1 級

(原価計算)

出題パターン別 仕訳対策問題集



年 組 番 氏名

【材料】

〈消費〉

①月末に素材の実際消費高を計上した。ただし、実際消費数量は2,500個であり、消費単価の計算は移動平均法による。なお、素材の消費高は予定価格法により、消費材料勘定を設けて処理している。

8月 1日 素材の前月繰越高 1,000個 @ ¥652 ¥ 652,000
 18日 素材の仕入高 1,800個 @ ¥680 ¥1,224,000

借	方	貸	方

②個別原価計算を採用している総社南工業株式会社は、素材300個を消費した。このうち、180個は製造指図書#2のために消費し、残り120個については出庫伝票に製造指図書番号の記載がなかった。なお、@ ¥4,200の予定価格により、消費材料勘定を設けている。

借	方	貸	方

〈差異〉

①高梁城南工業株式会社の素材に関する資料は次のとおりであった。よって予定価格による消費高と実際価格による消費高との差額を消費材料勘定から材料消費価格差異勘定に振り替えた。ただし、素材の予定価格は@ ¥470であり、実際消費単価の計算は総平均法によっている。

前月繰越高 1,500個 @ ¥500 ¥ 750,000
 当月仕入高 4,500個 @ ¥480 ¥2,160,000
 当月消費数量 5,000個

借	方	貸	方

②新見製作所は、月末に素材の予定価格による消費高 ¥674,000 と実際価格による消費高 ¥643,000 との差額を材料消費価格差異勘定に振り替えたとき、誤って、次のように処理していたのでこれを訂正した。ただし、消費材料勘定を設けている。

(借) 材料消費価格差異 31,000 (貸) 素材 31,000

借	方	貸	方

③会計期末に、材料消費価格差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。ただし、当会計期間における材料の予定消費高の合計額は ¥1,400,000 であり、実際消費高の合計額は ¥1,363,000 であった。

借	方	貸	方

〈棚卸減耗費〉

①月末における素材 A の帳簿棚卸高は 500 個@¥2,500 実地棚卸高は 490 個@¥2,500 であった。よって、素材勘定を修正した。

借	方	貸	方

②月末における買入部品の実地棚卸数量は 340 個であった。よって、次の買入部品に関する当月の資料にもとづいて買入部品勘定の残高を修正した。ただし、消費単価の計算は総平均法によっている。

前月繰越高 1,000 個 @¥400 ¥ 400,000 当月実際消費数量 3,600 個
 当月仕入高 3,000 個 @¥440 ¥1,320,000

借	方	貸	方

③月末における買入部品の実地棚卸数量は 480 個であった。よって、次の買入部品に関する当月の資料にもとづいて、買入部品勘定の残高を修正した。ただし、消費単価の計算は先入先出法によっている。

前月繰越高 700 個 @¥1,560 ¥1,092,000
 当月仕入高 2,800 個 @¥1,600 ¥4,480,000
 当月消費数量 3,000 個

借	方	貸	方

【労務費】

〈計上〉

①備前緑陽製作所は 6 月分の従業員の賃金を小切手を振り出して支払った。ただし、諸手当は賃金勘定に含めないで処理している。

総支払額 (基本賃金 ¥326,000 割増賃金 ¥41,000 諸手当 ¥47,000)
 控除額 (所得税 ¥33,000 健康保険料 ¥16,700)

借	方	貸	方

②賃金から控除して従業員から預かっていた健康保険料¥143,000 と、事業主が負担する健康保険料¥143,000 をともに健康保険組合へ現金で支払った。

借	方	貸	方

〈貸率差異〉

- ①当月の貸金の消費高について、次の資料を得たので、予定消費高と実際消費高との差額を貸率差異勘定に振り替えた。ただし、消費貸金勘定を設けている。

予定消費高 ¥1,275,000 実際消費高 ¥1,260,000

借	方	貸	方

- ②会計期末に、貸率差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。なお、貸率差異勘定の前月繰越高は¥76,000（貸方）であり、当月の貸金の実際消費高は予定消費高より¥22,000 多かった。

借	方	貸	方

- ③会計期末にあたり、貸率差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。なお、貸率差異勘定の前月繰越高は¥5,000（貸方）であり、当月の貸金の実際消費高は予定消費高より多く、この差額の¥9,000 は貸率差異勘定に振り替えられている。

借	方	貸	方

【経費】

〈消費（計上）〉

- ①個別原価計算を採用している邑久製作所は、当月分の水道料の消費高を工場 8 販売部 2 の割合で配分した。ただし、当月の支払高は¥650,000 で当月の測定高は¥610,000 である。なお、販売部の消費高は販売費および一般管理費勘定で処理している。

借	方	貸	方

【単純総合原価計算】

- ①単純総合原価計算を採用している勝山製作所は、月末に従業員に対する賞与の月割額を計上した。ただし、半年分の賞与の支払予定額は¥960,000 である。

借	方	貸	方

- ②単純総合原価計算を採用している蒜山製作所は、当月分の外注加工賃の消費高を計上した。ただし、当月支払高は¥380,000 であり、前月前払高¥40,000 当月前払高¥60,000 がある。

借	方	貸	方

- ③単純総合原価計算を採用している真庭製作所で、製品の完成とともに副産物が発生した。ただし、総合原価は ¥760,000 であり、そのうち副産物の評価額は ¥90,000 であった。

借	方	貸	方

【等級別総合原価計算】

- ①等級別総合原価計算を採用している株式会社落合製作所は、かねて1級製品 500 個を @ ¥3,000 で掛け売りしていたが、本日、そのうち 20 個が品違いのため返品されたので、売上高および売上原価の修正をおこなった。なお、この1級製品の製造原価は @ ¥2,400 である。

借	方	貸	方

- ②等級別総合原価計算を採用している久世製作所において1級製品 8,000 個と2級製品 6,000 個が完成するとともに副産物が発生した。ただし、この完成品の総合原価は ¥2,285,000 であり、そのうち副産物の評価額は ¥45,000 であった。なお、等価係数には次の各製品 1 個あたりの重量を用いている。

1 級製品 250 g 2 級製品 200 g

借	方	貸	方

- ③等級別総合原価計算を採用している林野製作所は、当月分の修繕料の消費高を計上した。ただし、当月支払高は ¥210,000 であり、前月末払高 ¥70,000 当月未払高 ¥90,000 がある。

借	方	貸	方

- ④等級別総合原価計算を採用している鴨方製作所の1月分の製品の販売に関する資料は、次のとおりであった。よって、売上高および売上原価を計上した。

売上高（掛け） 1 級製品 ¥980,000 2 級製品 ¥1,250,000
 売上製品原価 1 級製品 ¥750,000 2 級製品 ¥ 930,000

借	方	貸	方

【組別総合原価計算】

①組別総合原価計算を採用している和気閑谷製作所の6月分製品の販売に関する資料は、次のとおりであった。よって売上高および売上原価を計上した。

A組製品 売上高（掛け） ¥4,300,000 売上原価 ¥3,400,000
 B組製品 売上高（掛け） ¥6,400,000 売上原価 ¥5,100,000

借	方	貸	方

②組別総合原価計算を採用している矢掛産業株式会社は、当月分の経費消費高を計上した。

組直接費 外注加工賃 A組 ¥183,000 B組 ¥106,000
 組間接費 電力料 ¥64,000 保険料 ¥32,000

借	方	貸	方

③組別総合原価計算を採用している勝間田製菓株式会社は、素材および工場消耗品の消費高を計上した。ただし、A組の素材は@¥2,200 B組の素材は@¥3,100の予定価格を用い、消費材料勘定を設けている。また、工場消耗品の実際消費高は¥650,000であり、A組とB組に共通に消費した。

素材消費数量 A組 680個 B組 460個

借	方	貸	方

④組別総合原価計算を採用している鳥城製作所は、組間接費¥780,000を機械運転時間を基準にしてA組とB組に配賦した。

機械運転時間 A組 1,600時間 B組 800時間

借	方	貸	方

⑤組別総合原価計算を採用している朝日製作所は、月末に機械装置の減価償却費の月割額を計上した。ただし、1年分の減価償却費は¥2,340,000である。

借	方	貸	方

【工程別総合原価計算】

①工程別総合原価計算を採用している操山製作所において、第3工程（最終工程）で製品350個@¥6,000が完成し、倉庫に入庫した。

借	方	貸	方

②工程別原価計算を採用している大安寺製作所は、月末に工程別総合原価計算表を作成し、各工程の完成品原価を次のとおり計上した。なお、各工程の完成品はすべていったん倉庫に保管しており、第1工程完成品1,200個のうち1,000個を最終工程である第2工程に引き渡した。ただし、月初に第1工程完成品の在庫はなかった。

第1工程 ¥4,800,000 第2工程 ¥5,000,000

借	方	貸	方

③工程別総合原価計算を採用している芳泉工業株式会社は、第1工程完成品をすべて第2工程（最終工程）に投入し、第2工程において製品の完成とともに副産物が発生した。ただし、第1工程の完成品は¥1,980,000 第2工程の総合原価は¥5,000,000であり、そのうち副産物の評価額は¥440,000であった。

借	方	貸	方

④工程別総合原価計算を採用している一宮工業株式会社は、当月に販売された製品300個について、売上原価を計上した。ただし、当月中に完成した製品500個の完成品原価は¥1,500,000であり、月初に製品の在庫はなく、完成品原価と売上高の計上は済んでいる。

借	方	貸	方

⑤工程別総合原価計算を採用している城東工業株式会社では、第2工程（最終工程）において当月中に完成した製品600個の単価が¥900であることが判明したので、完成品原価を製品勘定に振り替えた。また、この製品はいったん倉庫に保管していたが、うち400個はすでに販売されているので、売上原価の計上もおこなった。ただし、月初に製品の在庫はなく、売上高の計上は済んでいる。

借	方	貸	方

【製造間接費】

①月末に、製造間接費の予定配賦額と実際配賦額との差額を製造間接費配賦差異勘定に振り替えた。なお、当月の製造間接費勘定の記入は次のとおりである。

製造間接費			
素材	90,000	製造	750,000
賃金	215,000		
諸口	465,000		

借	方	貸	方

②会計期末にあたり、製造間接費配賦差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。なお、製造間接費配賦差異勘定の前月繰越高は¥56,000（借方）であり、当月の製造間接費の予定配賦額は¥1,400,000 実際発生額は¥1,378,000であった。

借	方	貸	方

③個別原価計算を採用している西大寺製作所は、月末に、工場の従業員に対する退職給付引当金繰入額の月割額を計上した。ただし、退職給付引当金繰入額（年額）は¥7,440,000である。

借	方	貸	方

【仕損じ】

①製造指図書# 4の製品全部が仕損じとなり、新たに製造指図書を発行して、代品を製造することにした。ただし、製造指図書# 4に集計された製造原価は¥470,000であり、仕損品の評価額は¥65,000である。

借	方	貸	方

②個別原価計算を採用している高松農業製作所では、製造指図書# 3の製品の一部が仕損じとなったので、補修指図書# 3-1を発行して補修した。この補修指図書に集計された原価は、素材¥81,000 外注加工賃¥50,000である。

借	方	貸	方

- ③補修指図書# 1 2 5 - 3に集計された製造原価¥410,000 を仕損費勘定に計上していたが、本日、補修が完了したので製造指図書# 1 2 5に賦課した

借	方	貸	方

【作業くず】

- ①個別原価計算を採用している興陽製作所では、A 製品（製造指図書# 1）と B 製品（製造指図書# 2）を製造している過程で作業くずが発生し、これを¥42,000 と評価した。なお、この作業くずは製造指図書別に発生額を区別することができない。

借	方	貸	方

- ②個別原価計算を採用している瀬戸南製作所は、作業くずを¥70,000 で売却し、代金は月末に受け取ることにした。ただし、この作業くずは発生時に¥70,000 と評価し、製造原価から差し引いていた。

借	方	貸	方

- ③個別原価計算を採用している岡山工業製作所では、製造指図書# 5の製造中に作業くずが発生した。よって、これを¥25,000 と評価し、製造指図書# 5の製造原価から差し引いた。

借	方	貸	方

【工場会計】

- ①工場会計が独立している東岡山工業株式会社の本社は、健康保険料¥540,000（うち半額は事業主負担分）を小切手を振り出して支払った。ただし、事業主負担分のうち¥180,000 は工場の従業員に対するものである。また、健康保険料預り金勘定は本社にだけ設けてある。（本社の仕訳）

借	方	貸	方

- ②決算にさいし、本社は建物の減価償却額¥390,000（うち、工場分¥140,000）を計上した。ただし、間接法により記帳し、建物減価償却累計額勘定は本社にだけ設けている。なお、工場会計は本社会計から独立している。（本社の仕訳）

借	方	貸	方

- ③工場会計が独立している岡山東製作所の工場は、かねて、本社が得意先岡山南商店に掛け売りしていた製品 ¥3,800,000（製造原価 ¥2,900,000）のうち、¥700,000（製造原価 ¥650,000）が品違いであったので、本日、返品された。ただし、製品勘定は工場にだけ設けてある。（工場の仕訳）

借	方	貸	方

- ④組別総合原価計算を採用している岡山御津製作所の工場は、本社の指示により製造原価 ¥250,000 の A 組製品と製造原価 ¥120,000 の B 組製品を得意先青陵株式会社に発送した。ただし、工場会計は本社会計から独立しており、売上勘定と売上原価勘定は本社に、製品に関する勘定は工場に設けてある。（工場の仕訳）

借	方	貸	方

- ⑤工場会計が独立している天城製作所の本社は、かねて、工場に製品 ¥2,570,000（製造原価）を得意先倉敷南商店に発送するよう指示していたが、本日、発送済みの通知を受けたので、売上高（掛け） ¥3,360,000 および売上原価を計上した。ただし、本社には製品勘定は設けていない。（本社の仕訳）

借	方	貸	方

- ⑥工場会計が本社会計から独立している古城池産業株式会社の浜中工場は、本社が掛けで購入し、送付を受けていた燃料 ¥80,000 を本社の仕入先に直接返品し、このむね本社に通知した。（工場の仕訳）

借	方	貸	方

- ⑦かねて、工場は本社から工場消耗品の送付を受けていたが、そのなかに不良品 400 個 @ ¥300 があったので仕入先に直接返品し、このむね本社に連絡した。ただし、工場会計は、本社会計から独立している。（工場の仕訳）

借	方	貸	方

- ⑧工場会計が独立している倉敷中央工業株式会社の本社は、本社従業員の給料 ¥2,100,000 および工場従業員の賃金 ¥2,700,000 と給料 ¥500,000 について、所得税額 ¥260,000 健康保険料 ¥95,000 を控除した正味支払額を現金で支払った。ただし、所得税預り金勘定および健康保険料預り金勘定は本社にだけ設けている。（本社の仕訳）

借	方	貸	方

全商簿記実務検定 1 級 (原価計算) 出題パターン別 仕訳対策問題集解答



年 組 番 氏名

【材料】

〈消費〉

①月末に素材の実際消費高を計上した。ただし、実際消費数量は2,500個であり、消費単価の計算は移動平均法による。なお、素材の消費高は予定価格法により、消費材料勘定を設けて処理している。

8月 1日 素材の前月繰越高 1,000個 @ ¥652 ¥ 652,000
 18日 素材の仕入高 1,800個 @ ¥680 ¥1,224,000

借	方	貸	方
消費材料	1,675,000	素材	1,675,000

②個別原価計算を採用している総社南工業株式会社は、素材300個を消費した。このうち、180個は製造指図書#2のために消費し、残り120個については出庫伝票に製造指図書番号の記載がなかった。なお、@ ¥4,200の予定価格により、消費材料勘定を設けている。

借	方	貸	方
製造	756,000	消費材料	1,260,000
製造間接費	504,000		

〈差異〉

①高梁城南工業株式会社の素材に関する資料は次のとおりであった。よって予定価格による消費高と実際価格による消費高との差額を消費材料勘定から材料消費価格差異勘定に振り替えた。ただし、素材の予定価格は@ ¥470であり、実際消費単価の計算は総平均法によっている。

前月繰越高 1,500個 @ ¥500 ¥ 750,000
 当月仕入高 4,500個 @ ¥480 ¥2,160,000
 当月消費数量 5,000個

借	方	貸	方
材料消費価格差異	75,000	消費材料	75,000

②新見製作所は、月末に素材の予定価格による消費高 ¥674,000 と実際価格による消費高 ¥643,000 との差額を材料消費価格差異勘定に振り替えたとき、誤って、次のように処理していたのでこれを訂正した。ただし、消費材料勘定を設けている。

(借) 材料消費価格差異 31,000 (貸) 素材 31,000

借	方	貸	方
素材	31,000	材料消費価格差異	62,000
消費材料	31,000		

③会計期末に、材料消費価格差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。ただし、当会計期間における材料の予定消費高の合計額は ¥1,400,000 であり、実際消費高の合計額は ¥1,363,000 であった。

借	方	貸	方
材料消費価格差異	37,000	売上原価	37,000

〈棚卸減耗費〉

①月末における素材 A の帳簿棚卸高は 500 個@¥2,500 実地棚卸高は 490 個@¥2,500 であった。よって、素材勘定を修正した。

借	方	貸	方
棚卸減耗費	25,000	素材	25,000

②月末における買入部品の実地棚卸数量は 340 個であった。よって、次の買入部品に関する当月の資料にもとづいて買入部品勘定の残高を修正した。ただし、消費単価の計算は総平均法によっている。

前月繰越高 1,000 個 @¥400 ¥ 400,000 当月実際消費数量 3,600 個
 当月仕入高 3,000 個 @¥440 ¥1,320,000

借	方	貸	方
棚卸減耗費	25,800	買入部品	25,800

③月末における買入部品の実地棚卸数量は 480 個であった。よって、次の買入部品に関する当月の資料にもとづいて、買入部品勘定の残高を修正した。ただし、消費単価の計算は先入先出法によっている。

前月繰越高 700 個 @¥1,560 ¥1,092,000
 当月仕入高 2,800 個 @¥1,600 ¥4,480,000
 当月消費数量 3,000 個

借	方	貸	方
棚卸減耗費	32,000	買入部品	32,000

【労務費】

〈計上〉

①備前緑陽製作所は 6 月分の従業員の賃金を小切手を振り出して支払った。ただし、諸手当は賃金勘定に含めないで処理している。

総支払額 (基本賃金 ¥326,000 割増賃金 ¥41,000 諸手当 ¥47,000)
 控除額 (所得税 ¥33,000 健康保険料 ¥16,700)

借	方	貸	方
賃金	367,000	所得税預かり金	33,800
従業員賞与手当	47,000	健康保険料預り金	16,700
		当座預金	364,300

②賃金から控除して従業員から預かっていた健康保険料¥143,000 と、事業主が負担する健康保険料¥143,000 をともに健康保険組合へ現金で支払った。

借	方	貸	方
健康保険料預り金	143,000	現金	286,000
健康保険料	143,000		

〈貸率差異〉

- ①当月の貸金の消費高について、次の資料を得たので、予定消費高と実際消費高との差額を貸率差異勘定に振り替えた。ただし、消費貸金勘定を設けている。

予定消費高 ¥1,275,000 実際消費高 ¥1,260,000

借	方	貸	方
消費貸金	15,000	貸率差異	15,000

- ②会計期末に、貸率差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。なお、貸率差異勘定の前月繰越高は¥76,000（貸方）であり、当月の貸金の実際消費高は予定消費高より¥22,000多かった。

借	方	貸	方
貸率差異	54,000	売上原価	54,000

- ③会計期末にあたり、貸率差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。なお、貸率差異勘定の前月繰越高は¥5,000（貸方）であり、当月の貸金の実際消費高は予定消費高より多く、この差額の¥9,000は貸率差異勘定に振り替えられている。

借	方	貸	方
売上原価	4,000	貸率差異	4,000

【経費】

〈消費（計上）〉

- ①個別原価計算を採用している邑久製作所は、当月分の水道料の消費高を工場8 販売部2の割合で配分した。ただし、当月の支払高は¥650,000で当月の測定高は¥610,000である。なお、販売部の消費高は販売費および一般管理費勘定で処理している。

借	方	貸	方
製造間接費	488,000	水道料	610,000
販売費及び一般管理費	122,000		

【単純総合原価計算】

- ①単純総合原価計算を採用している勝山製作所は、月末に従業員に対する賞与の月割額を計上した。ただし、半年分の賞与の支払予定額は¥960,000である。

借	方	貸	方
製造	160,000	従業員賞与手当	160,000

- ②単純総合原価計算を採用している蒜山製作所は、当月分の外注加工賃の消費高を計上した。ただし、当月支払高は¥380,000であり、前月前払高¥40,000 当月前払高¥60,000がある。

借	方	貸	方
製造	360,000	外注加工賃	360,000

③単純総合原価計算を採用している真庭製作所で、製品の完成とともに副産物が発生した。ただし、総合原価は ¥760,000 であり、そのうち副産物の評価額は ¥90,000 であった。

借 方		貸 方	
製品	670,000	製造	760,000
副産物	90,000		

【等級別総合原価計算】

①等級別総合原価計算を採用している株式会社落合製作所は、かねて1級製品 500 個を @ ¥3,000 で掛け売りしていたが、本日、そのうち 20 個が品違いのため返品されたので、売上高および売上原価の修正をおこなった。なお、この1級製品の製造原価は @ ¥2,400 である。

借 方		貸 方	
売上	60,000	売掛金	60,000
1 級製品	48,000	売上原価	48,000

②等級別総合原価計算を採用している久世製作所において1級製品 8,000 個と2級製品 6,000 個が完成するとともに副産物が発生した。ただし、この完成品の総合原価は ¥2,285,000 であり、そのうち副産物の評価額は ¥45,000 であった。なお、等価係数には次の各製品 1 個あたりの重量を用いている。

1 級製品 250 g 2 級製品 200 g

借 方		貸 方	
1 級製品	1,400,000	製造	2,285,000
2 級製品	840,000		
副産物	45,000		

③等級別総合原価計算を採用している林野製作所は、当月分の修繕料の消費高を計上した。ただし、当月支払高は ¥210,000 であり、前月末払高 ¥70,000 当月末払高 ¥90,000 がある。

借 方		貸 方	
製造	230,000	修繕料	230,000

④等級別総合原価計算を採用している鴨方製作所の 1 月分の製品の販売に関する資料は、次のとおりであった。よって、売上高および売上原価を計上した。

売上高（掛け） 1 級製品 ¥980,000 2 級製品 ¥1,250,000
 売上製品原価 1 級製品 ¥750,000 2 級製品 ¥ 930,000

借 方		貸 方	
売掛金	2,230,000	売上	2,230,000
売上原価	1,680,000	1 級製品	750,000
		2 級製品	930,000

【組別総合原価計算】

①組別総合原価計算を採用している和気閑谷製作所の6月分製品の販売に関する資料は、次のとおりであった。よって売上高および売上原価を計上した。

A組製品 売上高(掛け) ¥4,300,000 売上原価 ¥3,400,000
 B組製品 売上高(掛け) ¥6,400,000 売上原価 ¥5,100,000

借 方		貸 方	
売掛金	10,700,000	売上	10,700,000
売上原価	8,500,000	A組製品	3,400,000
		B組製品	5,100,000

②組別総合原価計算を採用している矢掛産業株式会社は、当月分の経費消費高を計上した。

組直接費 外注加工賃 A組 ¥183,000 B組 ¥106,000
 組間接費 電力料 ¥64,000 保険料 ¥32,000

借 方		貸 方	
A組製造	183,000	外注加工賃	289,000
B組製造	106,000	電力料	64,000
組間接費	96,000	保険料	32,000

③組別総合原価計算を採用している勝間田製菓株式会社は、素材および工場消耗品の消費高を計上した。ただし、A組の素材は@¥2,200 B組の素材は@¥3,100の予定価格を用い、消費材料勘定を設けている。また、工場消耗品の実際消費高は¥650,000であり、A組とB組に共通に消費した。

素材消費数量 A組 680個 B組 460個

借 方		貸 方	
A組製造	1,496,000	消費材料	2,922,000
B組製造	1,426,000		
組間接費	650,000	工場消耗品	650,000

④組別総合原価計算を採用している鳥城製作所は、組間接費¥780,000を機械運転時間を基準にしてA組とB組に配賦した。

機械運転時間 A組 1,600時間 B組 800時間

借 方		貸 方	
A組製造	520,000	組間接費	780,000
B組製造	260,000		

⑤組別総合原価計算を採用している朝日製作所は、月末に機械装置の減価償却費の月割額を計上した。ただし、1年分の減価償却費は¥2,340,000である。

借 方		貸 方	
組間接費	195,000	減価償却費	195,000

【工程別総合原価計算】

①工程別総合原価計算を採用している操山製作所において、第3工程（最終工程）で製品350個@¥6,000が完成し、倉庫に入庫した。

借	方	貸	方
製品	2,100,000	第3工程製造	2,100,000

②工程別原価計算を採用している大安寺製作所は、月末に工程別総合原価計算表を作成し、各工程の完成品原価を次のとおり計上した。なお、各工程の完成品はすべていったん倉庫に保管しており、第1工程完成品1,200個のうち1,000個を最終工程である第2工程に引き渡した。ただし、月初に第1工程完成品の在庫はなかった。

第1工程 ¥4,800,000 第2工程 ¥5,000,000

借	方	貸	方
第1工程半製品	4,800,000	第1工程製造	4,800,000
第2工程製造	4,000,000	第1工程半製品	4,000,000
製品	5,000,000	第2工程製造	5,000,000

③工程別総合原価計算を採用している芳泉工業株式会社は、第1工程完成品をすべて第2工程（最終工程）に投入し、第2工程において製品の完成とともに副産物が発生した。ただし、第1工程の完成品は¥1,980,000 第2工程の総合原価は¥5,000,000であり、そのうち副産物の評価額は¥440,000であった。

借	方	貸	方
第2工程製造	1,980,000	第1工程製造	1,980,000
製品	4,560,000	第2工程製造	5,000,000
副産物	440,000		

④工程別総合原価計算を採用している一宮工業株式会社は、当月に販売された製品300個について、売上原価を計上した。ただし、当月中に完成した製品500個の完成品原価は¥1,500,000であり、月初に製品の在庫はなく、完成品原価と売上高の計上は済んでいる。

借	方	貸	方
売上原価	900,000	製品	900,000

⑤工程別総合原価計算を採用している城東工業株式会社では、第2工程（最終工程）において当月中に完成した製品600個の単価が¥900であることが判明したので、完成品原価を製品勘定に振り替えた。また、この製品はいったん倉庫に保管していたが、うち400個はすでに販売されているので、売上原価の計上もおこなった。ただし、月初に製品の在庫はなく、売上高の計上は済んでいる。

借	方	貸	方
製品	540,000	第2工程製造	540,000
売上原価	360,000	製品	360,000

【製造間接費】

①月末に、製造間接費の予定配賦額と実際配賦額との差額を製造間接費配賦差異勘定に振り替えた。なお、当月の製造間接費勘定の記入は次のとおりである。

製造間接費			
素材	90,000	製造	750,000
賃金	215,000		
諸口	465,000		

借	方	貸	方
製造間接費配賦差異	20,000	製造間接費	20,000

②会計期末にあたり、製造間接費配賦差異勘定の残高を売上原価勘定に振り替えた。なお、製造間接費配賦差異勘定の前月繰越高は¥56,000（借方）であり、当月の製造間接費の予定配賦額は¥1,400,000 実際発生額は¥1,378,000であった。

借	方	貸	方
売上原価	34,000	製造間接費配賦差異	34,000

③個別原価計算を採用している西大寺製作所は、月末に、工場の従業員に対する退職給付引当金繰入額の月割額を計上した。ただし、退職給付引当金繰入額（年額）は¥7,440,000である。

借	方	貸	方
製造間接費	620,000	退職給付費用	620,000

【仕損じ】

①製造指図書# 4の製品全部が仕損じとなり、新たに製造指図書を発行して、代品を製造することにした。ただし、製造指図書# 4に集計された製造原価は¥470,000であり、仕損品の評価額は¥65,000である。

借	方	貸	方
仕損品	65,000	製造	470,000
仕損費	405,000		

②個別原価計算を採用している高松農業製作所では、製造指図書# 3の製品の一部が仕損じとなったので、補修指図書# 3-1を発行して補修した。この補修指図書に集計された原価は、素材¥81,000 外注加工賃¥50,000である。

借	方	貸	方
仕損費	131,000	素材	81,000
		外注加工賃	50,000

- ③補修指図書# 1 2 5 - 3に集計された製造原価¥410,000を仕損費勘定に計上していたが、本日、補修が完了したので製造指図書# 1 2 5に賦課した

借	方	貸	方
製造	410,000	仕損費	410,000

【作業くず】

- ①個別原価計算を採用している興陽製作所では、A製品（製造指図書# 1）とB製品（製造指図書# 2）を製造している過程で作業くずが発生し、これを¥42,000と評価した。なお、この作業くずは製造指図書別に発生額を区別することができない。

借	方	貸	方
作業くず	42,000	製造間接費	42,000

- ②個別原価計算を採用している瀬戸南製作所は、作業くずを¥70,000で売却し、代金は月末に受け取ることにした。ただし、この作業くずは発生時に¥70,000と評価し、製造原価から差し引いていた。

借	方	貸	方
未収金	70,000	作業くず	70,000

- ③個別原価計算を採用している岡山工業製作所では、製造指図書# 5の製造中に作業くずが発生した。よって、これを¥25,000と評価し、製造指図書# 5の製造原価から差し引いた。

借	方	貸	方
作業くず	25,000	製造	25,000

【工場会計】

- ①工場会計が独立している東岡山工業株式会社の本社は、健康保険料¥540,000（うち半額は事業主負担分）を小切手を振り出して支払った。ただし、事業主負担分のうち¥180,000は工場の従業員に対するものである。また、健康保険料預り金勘定は本社にだけ設けてある。（本社の仕訳）

借	方	貸	方
健康保険料	90,000	当座預金	540,000
工場	180,000		
健康保険料預り金	270,000		

- ②決算にさいし、本社は建物の減価償却額¥390,000（うち、工場分¥140,000）を計上した。ただし、間接法により記帳し、建物減価償却累計額勘定は本社にだけ設けている。なお、工場会計は本社会計から独立している。（本社の仕訳）

借	方	貸	方
工場	140,000	建物減価償却累計額	390,000
減価償却費	250,000		

- ③工場会計が独立している岡山東製作所の工場は、かねて、本社が得意先岡山南商店に掛け売りしていた製品 ¥3,800,000（製造原価¥2,900,000）のうち、¥700,000（製造原価¥650,000）が品違いであったので、本日、返品された。ただし、製品勘定は工場にだけ設けてある。（工場の仕訳）

借	方	貸	方
製品	650,000	本社	650,000

- ④組別総合原価計算を採用している岡山御津製作所の工場は、本社の指示により製造原価¥250,000のA組製品と製造原価¥120,000のB組製品を得意先青陵株式会社に発送した。ただし、工場会計は本社会計から独立しており、売上勘定と売上原価勘定は本社に、製品に関する勘定は工場に設けてある。（工場の仕訳）

借	方	貸	方
本社	370,000	A組製品	250,000
		B組製品	120,000

- ⑤工場会計が独立している天城製作所の本社は、かねて、工場に製品¥2,570,000（製造原価）を得意先倉敷南商店に発送するよう指示していたが、本日、発送済みの通知を受けたので、売上高（掛け）¥3,360,000および売上原価を計上した。ただし、本社には製品勘定は設けていない。（本社の仕訳）

借	方	貸	方
売掛金	3,360,000	売上	3,360,000
売上原価	2,570,000	工場	2,570,000

- ⑥工場会計が本社会計から独立している古城池産業株式会社の浜中工場は、本社が掛けで購入し、送付を受けていた燃料¥80,000を本社の仕入先に直接返品し、このむね本社に通知した。（工場の仕訳）

借	方	貸	方
本社	80,000	燃料	80,000

- ⑦かねて、工場は本社から工場消耗品の送付を受けていたが、そのなかに不良品400個 @¥300があったので仕入先に直接返品し、このむね本社に連絡した。ただし、工場会計は、本社会計から独立している。（工場の仕訳）

借	方	貸	方
本社	120,000	工場消耗品	120,000

- ⑧工場会計が独立している倉敷中央工業株式会社の本社は、本社従業員の給料¥2,100,000および工場従業員の賃金¥2,700,000と給料¥500,000について、所得税額¥260,000 健康保険料¥95,000を控除した正味支払額を現金で支払った。ただし、所得税預り金勘定および健康保険料預り金勘定は本社にだけ設けている。（本社の仕訳）

借	方	貸	方
給料	2,100,000	所得税預り金	260,000
工場	3,200,000	健康保険料預り金	95,000
		現金	4,945,000